

基肄城築造1350年

基肄城を知る③

新たに発見された通水溝



県道17号久留米基山筑紫野線の城戸インターから丸林集落上方の谷沿いの道を登っていくと、川のせせらぎの中に、石造の鳥居が見えてきます。その左脇には、四角形の石組みがあり、その中から水が流れ出ています。そこには、一見のどかで何気ないような、けれど、何となく由緒あるような不思議な雰囲気が醸し出されています。

囲まれた古代山城です。この城壁は、ほとんどが土を盛った土塁でつくられています。谷部で水が流れているようなところでは、石を積んで石塁としています。水門跡はこの石塁の一部としてつくられているのです。水門跡は、基肄城のほぼ中央の北から南に下る大きな谷部にあり、城内では最も標高の低い

場所につくられています。当然ですが、基山一帯に雨が降ると基肄城内では、中央の谷部で最も低いここに水が集まりますので、城外に排水しなければなりません。また、敵が攻めてきた時に城内に籠って戦う場合には生活水が必要となります。もしかしたら、水門跡は排水だけでなく、貯水のための調節機能も

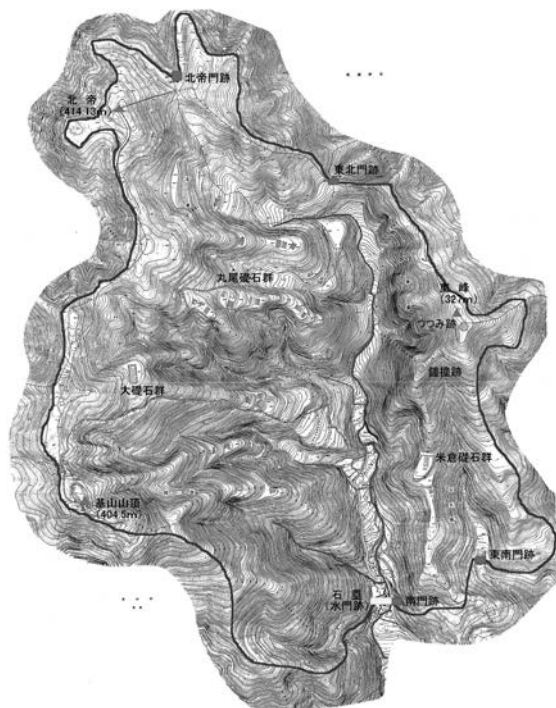
持っていたかも知れません。

水門跡のある石塁は千年以上も残っていましたが、既に崩壊した部分やすぐにでも崩れてきそうな危険な状況もあったため、平成22年より保存修理工事に着手しています。工事は、まず対象範囲の石塁の石材一石ずつを測量しながら解体し、並行して考古学的な発掘調査を実施しました。この基肄城の石塁がどのような技術で積み上げられたか、また何が原因で崩壊したかなどを究明し、解体後の復元的修理工事に際して、築造当時と同じ技術で積み上げ、崩壊しないよ

うにするためです。このような慎重な作業の中で新たに3つの通水溝が発見されました。つまり、基肄城の谷水を城外へ流していたのは、これまでに見えていた水門跡の水口だけではなかった可能性ができました。新発見の通水溝は、その全体を把握できたわけではありませんが、排水機能を持つと考えられるもので、同じ石塁の中に4つの排水口を備えた例は、今のところ韓国の古代山城に確認されてはいますが、日本には例がありません。日本書紀では、基肄城築造には兵法に詳しい百済の高官が派遣されたとありますが、今回の発見は、基肄城だけではなく、日本や韓半島の古代山城を考えるうえで貴重なものと言えるでしょう。

ここは、以前から基肄城の水門跡と呼ばれ、基山（きざん）登山の際の主要な玄関口ともなっています。では、水門跡とはどのような遺構でしょうか。

基肄城は、基山（きざん）山頂から谷を包み込むように東の峰までを約3.9キロメートルの城壁で



基肄城跡主要遺構配置図



新たに発見された3つの通水溝

※問合せ先
教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92-22200